

舟越保武《長崎二十六殉教者記念碑》についての一考察 —その歴史的背景と造形的典拠を中心に—

成城大学
野城今日子

舟越保武は佐藤忠良、柳原義達らと並ぶ戦後を代表する彫刻家である。制作した彫刻作品にキリスト教主題のものが多く、いうまでもなく彼がカトリック教徒であったことが大きい。その中でも《長崎二十六殉教者記念碑》(1958～1962年、長崎市西坂公園)はその代表作と語られてきた。にもかかわらず、美術史的な研究はほとんどなされておらず、たとえあってもそれは舟越の極めて個人的なカトリック信仰を吐露したものの、といった言説でいろどられてきた。

そこで本発表は、制作の背景にあった当時の世相を明らかにし、これを前提に舟越がいかにより自らの芸術的達成をなしたかを、造形面へのアプローチを試みることで明らかにしたい。

まず本作の歴史的背景について考察する。もともとこの設置計画を決定したのは長崎市であった。1950年代、長崎市は観光施設の建設とインフラ整備により経済効果を得ることを目指したが、二十六聖人の聖地も「観光地のシンボル」としての大きな目玉であり、それゆえの記念碑設置であった。一方、長崎市から設置計画を受け継いだ二十六聖人聖地保存会は、西欧で作られた二十六聖人像にのっとり、過酷な磔刑場面を克明に表すことによって、彼らが「殉教者として顕彰」されることを期待していた。

舟越はこのような依頼主たちの意を十分に考慮しつつ、結果的には自己の芸術的達成に果敢にいどんだことが、造形面への考察によって明らかにすることが出来る。舟越は様々な表現方法の中から「天を仰ぎながら聖歌を歌う顔」「合掌して祈りを捧げる手」「昇天を表す浮遊した足」の部分のみを写實的に表し、その他は「衣服」とわかる程度の抽象的形態で表すことによって祈りを捧げながら昇天する姿のみを簡潔に表現することを試みた。実はこの聖人の姿は、ゴシック期の墓碑彫刻と類似性が認められる。ゴシック期の人々は、死者自身が祈りを捧げている姿が刻まれた墓碑彫刻を見て、死者が救われていること感じながら慰霊の儀を行っていた。要するに舟越は「祈り」や「昇天」を表す身体各部分を強調することによって、魂の救済という「慰霊」の意を表したと解釈できる。過去と現代の時代様式を複数混在させる舟越の造形手法は初期作品から一貫してみられたが、本作品はその完成されたかたちとみなすことができよう。このように舟越は依頼主たちのさまざまな要求に応えつつ、「慰霊」の意味をこめた記念碑を制作したと考えられる。

そして、この記念碑を訪れる人々が、単に二十六人への慰霊にとどまらず、時期的に見て長崎原爆の犠牲者への慰霊という重層的なイメージを持ったことは容易に想像できる。舟越はこの半ば抽象的な造形を選択することによって、当時の人々に様々なイメージを喚起させる機能も持たせた、ということも十分推測が可能であろう。